

## 児童期の心理的ストレスに関する一研究

堂野 佐俊・田頭 穂積・土江 禎子

An Analytical Study on the Psychological Stress of School Children

Satoshi Dohno・Hozumi Tagashira・Yoshiko Tsuchie

### Abstract

This study is focused on the psychological stresses of today's school children. 303 children were conducted an investigation about the stresses on the school life and the family life, including the neighborhood life. The purposes of this study are to analyze children's stresses, and to compare those between children live in urban and local cities.

By the factor analysis, four factors were found as follows. These were items in regard to 1) the learnings and results at school, 2) the relationships with friends or teachers, 3) the relationships with parents and siblings, and 4) the human relationships with families and neighborhoods, including playing friends. Three factors were found in the school life. These were the stresses, such as, in regard to 1) the learnings, 2) the relationships to the friends, and 3) the social recognitions. In the family life, there were also three factors, that is, the stresses regarding 1) the human relationships with families, 2) the fundamental habits, 3) the playing problems such as friends, times and spaces, kinds of games.

There were significant differences between boys' and girls' stresses. In general, girls felt more stresses than boys. Also, there were significant developmental changes between the stresses of 4th- and 6th- grade's children. Both on boys and girls, the 5th grade is like as the turning point for many psychological factors.

現代は「ストレス時代」とも評され、老人から乳幼児に至るまで、現代人一億総ストレスの社会を迎えている。人類の歴史を辿ってみると、人間は知恵をしぼり、工夫を凝らし、数々の偉大な発見や発明を繰り返しながら、生活を合理化・快適化して進歩してきた。こうした貴重で漸進的な成果は、人類の恒久的な幸福と平和を願いつつ蓄積され、後世の人間への文化遺産として伝承されてきた。しかし、そうした子々孫々に誇るべき輝かしい財産とは裏腹に、その一方で、人類は自分達の生活や社会にとって望ましがらざる多大な代償も支払い続けている。こうした人間社会の進歩に伴う両面価値的な影響の大きさは、Carson, R. (1962) の「沈黙の春」や Lynch, J. J. (1976) の「現代人の愛と孤独」などにも指摘されているように、かなりの歳月を経過しなければ効果を示さない。前者では、農薬の長期濫用の有害性が散布後20~30年も経て少しずつ現れはじめ、その影響は思いもかけない遠方にまで及び、カンザス州で散布されたと思われる DDT が、何年もたつてロッキー山脈の白頭ワシや北極地方の野生動物の滅滅に一役かったというのである。また後者では、現代病といわれる諸種の成人病の場合も、その原因や遠因さらに源淵に遡れば、乳幼児期からの様々なストレス体験や生活環境の変化を積み重ねて徐々に出現してくるものも多いという。

こうした高度の産業化社会を誕生させ画期的な科学技術の進歩をもたらした今日の文明社会

においては、確かに人類の生活と文化は進歩発展し、多くの面で人類は能率的で便利な生活を享受することができるようになった。しかし、一方では上記の例にみられるように将来に及ぶマイナスの影響と効果があることも認識しておくことが大切である。つまり、今日の我々人間の幸福と繁栄とをもたらした近代の文明社会そのものが、そのつけとして、種々の公害問題や環境汚染問題など、現代及び将来の生態系全般に多くの課題を突きつけてきているのである。特に、こうした寄与や貢献などがとかく近未来的・短期的な視野でのメリットとして評価されがちであるのに対して、これらが同時にかなり遡及的で長期間に及ぶデメリットの可能性をも潜在させている点についての十分な理解が必要であろう。

人間にとってストレスは、まさにこうした観点での見方が要求される問題である。つまり、乳幼児期からの我々人間を取り巻くストレス環境は、極端な表現をすれば、上の農薬の危険性や成人病の源流が生命態系に与える警告と極めて類似している。冒頭にも記したように、特にストレス時代とも呼ばれる現代においては、人間の健康と精神的ストレスとの関係について、上のような観点で興味深い指摘や示唆が多々発表されている。結局、人間にとって健康という場合には、とかく身体的な側面にのみ関心が向きやすく、精神的な健康（心の健康）についての配慮が希薄になりがちであること、また、日常生活におけるストレスはその両側面に影響を及ぼし、長期間にわたってジワジワと効果を発揮してくるものであること、さらにこのような遡及的な影響は、高度産業化社会の地球環境の破壊傾向と同様、我々の世代のみならず後世の子孫の時代にまで及ぶものであること、などが主な論点となっている。

今世紀初頭、Freud, S. (1923) は、人格は社会的接触の中で形成され、特に幼少時期の体験が人格完成に極めて重要であることを明らかにした。その後、Bowlby, J. (1951) は WHO 要請を受けて行った「母親の養育が子どもの精神衛生に及ぼす影響」に関する研究において、幼児期の両親との別離などのストレスが身体的・情緒的・知的発達にさまざまな障害的影響を及ぼすことについて詳細に報告している。Spitz, R. A. (1950) や Ordway, N. K. (1969) なども同様に、幼少時の体験、特にその精神的ストレスが各発達段階における様々な心理学的・医学的な問題と密接な関連性があることを見出している。さらに、Harlow, H. F. (1958) は、サル代理母の実験的研究において、幼少時の体験がその後の心身の健康に多大な影響を及ぼすことを報告している。こうした傾向は他の動物の場合も同様であり、古くは Pavlov, I. P. (1929) のイヌにおける愛着体験の消化器官への影響、Liddell, H. S. (1954) のヤギとヒツジにおける母親の同伴のストレス耐性への影響、Scott, J. P. (1967) の子犬における初期経験の不快性と社会性の発達との関係、など多くの示唆的なデータが示されている。

近年、人間の発達におけるストレス環境の影響に関しても、上記のような結果に基づいて、多方面から究明が試みられている。Chambers, W. N. & Reiser, M. F. (1953) は、心臓病患者の病状を分析し、小さなストレスの蓄積が、まさに“ラクダの背の一本のワラシベ”として作用し、病気の進行を早め悪化させていることを見出している。また、Wolf, S. & Goodell, H. (1976) は、戦争などで同等のストレスを受けても所属するグループの雰囲気や集団凝集性の相違などによって精神医学的障害に陥る程度が異なることを報告している。こうした一連の研究以外にも、Cannon, W. B. (1929) は、ストレス状況に関連の深い苦痛・飢え・恐れ・怒りなどの種々の情緒が生理作用や病状の進行に多大な影響を及ぼすことを指摘している。さらに、進化論で有名な Darwin, C (1955) も、晩年の研究テーマとして愛情とストレスとの関係について取り上げ、「愛情の生理学」などとして、数々の功績を残している。

現代のように複雑多様化した社会の中では、当然ながら、誰しも何らかのストレスを体験しないで生活することは困難である。仕事に精を出し、業績を上げ、家族を養い、文化を創造し、

それを維持し、多くの面で社会を発展させる旗手としての成人にストレスが多いことは推測に難くない。しかし、今日においては、特に子どもや青少年のストレスが多であることが指摘されるところである。偏差値教育、学歴偏重主義、進学戦争、受験地獄、英才教育、早期教育、詰め込み教育、マルチ教育など、現代の子ども達が置かれている状況は、乳幼児期から青年期まで、まさにストレス環境そのものといえよう。こうした社会的環境下にもあり、近年子どものストレスの実態とその問題性に関して、さまざまな立場で検討が行われている。

人間の発達過程においては種々の環境が待ち受けている。子どもにとってそうした成育環境の性質は、心の健康の上で、また精神衛生の上で極めて大きな影響力をもつものである。心の健康についての概念は、必ずしも一様ではないが、一般的には「自己があるがままに認識し、自分を取り巻く諸環境を十分に考慮しながら、将来に対して自己実現を目指して常に前向きで意欲的な姿勢をもって努力できる状態」と言えよう。したがって、今日の子ども達を取り巻くストレス過剰の生活環境では、子ども達は前向きで意欲的な態度で日常生活に取り組みむことが困難になりやすく、心の健康の面ではきわめて憂慮すべき状況となりつつあるといえよう。また、こうした精神的健康を達成して心身共に健康的な生活を送るためには、子どもにとっての精神衛生に関する配慮が特に重要となってくる。つまり、日常生活において精神的な不健康をもたらし様々な要因について、そうした事態に至らしめることを予防し、その対策を考え、子ども達が日々健全な生活を送ることができるように、多方面から十分な配慮が払われることが大切なのである。このように、精神衛生学的な観点からみても、今日の子どもにとって特に考慮すべき課題としてストレスの影響力に関することがあげられる。

ストレスの概念やその影響力については、Cannon, W. B. (1929) の「恒常性理論」にまで遡るまでもなく、この領域における最大の貢献とされている Selye, H. (1974) の生理学的な分析に基づく「ストレス学説」を始め、今日まで多くの示唆的な理論が示されている。Selye, H. によると、不快・悲しみ・仕事などの刺激(ストレッサー)が副腎皮質への反応をもたらし、これに適応しているうちに生体内の副腎皮質ホルモンに副作用が生起し、精神的な障害を生じさせることがあるというのである。今日まで、多くの研究や検討を通して、ストレスに関する様々な現象や事実が分析・究明され、種々の仮説と理論が検証・構築されている。これらの諸研究に共通して明らかにされていることは、生体が外界からのストレスに対して交感神経と副交感神経(自律神経と脳下垂体副腎系などの内分泌系)の二つのシステムを通して反応し、生体を常に防衛しようとする事、外界のストレスの程度とその生体への影響、ストレス尺度の設定とストレス次元の段階、ストレスの生理心理学的なメカニズム、など枚挙に暇がない。また、その多くはストレスの身体への悪影響を強調するものであり、とかくマイナスの面のみ視点が向きやすい。しかし、Selye, H. (1980) も指摘するように、中には生体にとって有益な影響をもたらす「良性ストレス」の存在もある。つまり、ある程度のストレスは健康や仕事の遂行に良好な効果をもたらすということも忘れてはいけない。とはいうものの、やはりストレスが人間や動物に及ぼすマイナスの影響の大きさは、特に今日においては無視できない。複雑多様で激動する今日の社会環境の中で、こうしたストレスが、子どもを含めた現代人すべてに重大な悪影響を及ぼしていることは明らかである(堂野, 1987, 他)からである。

長根(1987)は、そうした子どものストレス分析において、現代児童のストレスの実態の把握を意図したストレス尺度を作成している。彼は、この尺度を用いて、小学校4年生～6年生の子どもを対象とした分析を行い、児童の学校生活におけるストレスとして、(1)友達との関係に関する因子、(2)不注意や能力の欠陥で自分が取り残されるのを恐れる因子、(3)人前で発表することに関する因子、の3因子を見出している。また、児童期のストレスにおいては性差も認

められ、全般的に女兒の方がストレスを強く感じているようであった。この性別間における差異の傾向は、第2因子において特に大きく、女兒は皆から取り残されることに多大なストレスを感じやすいようである。しかし、学年間（4～6年生）ではストレスに顕著な差異はみられず、この時期におけるストレスにはそれほど大きな発達的な変化は認められないようである。

本研究においては、長根（1987）に基づき、学童期の子どもにおける心理的ストレスの実態に関して分析することが主な目的となっている。したがって、同様のストレス尺度を用い、同年齢の子どもを対象として得られたデータの分析ということになり、長根の得た首都圏における子どものストレスと今回の島根県の一地域の場合との比較文化的な検討も目的の一つとなってくる。さらに、長根の場合には学校生活場面におけるストレスのみに限っていたが、本研究においては、学校生活のみならず、それとともに子どもの生活の大部分を占める家庭での生活や地域での生活における心理的ストレスについても付加して分析を試みた。こうしたデータを通して、現代における子どものストレスの実態に関して、より総合的に、より全体的に、より現実的に把握することができると考えられる。

## 方 法

手続き (1)尺度の構成：基本的には、長根（1987）の学校生活に関するストレス尺度（32項目）を利用することにした。さらに、家庭生活および地域生活の場面におけるストレスについての尺度を作成するため、自由記述式のアンケートを作成し、女子大学生（初等教育学科）に回答を依頼した。その内容は、「あなたが小学生の時代に、学校生活場面以外で、不安に感じたり、いやだと思ったり、何らかのストレスを感じたことを思いっただけ記述してください」というものであった。こうした予備調査データの分析と検討から、家庭生活および地域生活に関するストレス尺度として18項目が設定された。したがって、今回のアンケートにおいては、子どものストレス場面として合計50項目の尺度について分析することになった。

(2)調査の実施：作成されたアンケート調査は、下記の対象および時期において、集団場面で実施された。実施にあたっては、前もって各クラス担任に調査に関する依頼と説明の文書を配布し、教示やその他の条件ができるだけ同様となるように配慮した。アンケート用紙を前にした子ども達への教示は、「これから、皆さんに1番～50番までの質問に答えてもらいます。答え方は簡単です。まず、例を見て下さい。次のような質問があります。これを読んで、{はい・いいえ} のどちらか思い当たる方に○印を付けます。次に、それをどれくらい強く思っているのか、{とても・すこし} のどちらかに○印を付けてください。でも、もし、{はい・いいえ} が分からない時は、?のところ○印を付けてください」とした。こうした条件統制を加えた上で、各項目について、5段階評定としての回答を得た。

対象 今回のアンケート調査の対象としては、島根県出雲市近郊のS小学校の4年生～6年生を用いた。その303名の児童の学年別・性別の構成内訳はTable 1に示すとおりである。なお、学校の所在地は、中規模都市に隣接する比較的閑静な農業中心的な地域であり、その4年生以上の児童全員が対象となっている。

Table 1 被調査者内訳（人）

|    | 4年  | 5年 | 6年  | 合計  |
|----|-----|----|-----|-----|
| 男子 | 61  | 53 | 45  | 159 |
| 女子 | 49  | 36 | 59  | 144 |
| 合計 | 110 | 89 | 104 | 303 |

調査時期 アンケート調査の実施にあたっては、1989年9月11日～9月30日の間において、学年や各クラスの事情を考慮して、上記のような手続きにより、各担任によって行われた。

**結果処理の方法** 5段階として評定された回答は、以下の基準と方法で処理した。

(1)各項目に対する子どもの5段階の反応には、ストレス度の高い方から順に5～1点を与え、数量化を行った。したがって、個人ごとのストレスの最高得点は250点となる。

(2)集計された個人別得点および項目別得点に基づき、コンピュータ(PC-9801VX)を用いて因子分析を行った。この因子分析では、主因子法により因子を抽出した後、バリマックス回転を行った。なお、因子分析にあたっては、次の三種の次元に分けて検討を試みることにした。つまり、①日常生活全般におけるストレス(50項目)、②学校生活におけるストレス(32項目)、および③家庭・地域生活におけるストレス(18項目)の三側面に関して分析した。

(3)全項目および各因子群ごとに、それぞれの平均値(M)と標準偏差(SD)とを算出した後、「学年×性」の二要因分散分析を行い、ストレスの発達差および性差について検討した。

(4)上の分散分析により、学年間および男女間の差異において主効果の見られた項目について、それぞれの下位分析として、t検定を試みた。

## 結果および考察

### 1. 児童の日常生活全般におけるストレス

回収されたアンケートの全項目の回答について数量化を行い、その結果に関して因子分析の手法を施したところ、解釈が可能な四つの因子が抽出された。Table 2は、この操作によって0.4以上の高い負荷量を示した項目を列挙したものである。この表より明らかであるように、子どもの日常生活の全般を通しての心理的ストレスの要因として、第1番目に学校生活に関係したストレスがあげられる。それらの中でも、児童にとって授業中の諸環境は特にストレスの度合いが高いようである。第2番目には、教師や両親を対象とした対人関係や学校の友人関係などの人間関係に関連したストレスがある。こうした学校内外での人間関係も児童にとってはストレスの大きい要因のようである。第3番目には、家庭生活上の諸状況におけるストレスがあり、特に両親や親族からの愛情に対する不安などは大きいストレスとなっているようである。さらに、第4番目として、家庭生活と地域生活に関連したストレスが一つの群をなしているようである。しかし、これらと同類と思われる項目の中には第2因子として位置づけられているものも含まれており、尺度設定上の問題についての検討も必要と考えられる。

Fig. 1は、こうした児童の日常生活全般を通じたストレスの結果について、学年別及び性別に集計して図示したものである。この図より明らかであるように、児童のストレスの全般的な傾向としては、学年間においても、性別においても、顕著な差異はみられないようである。

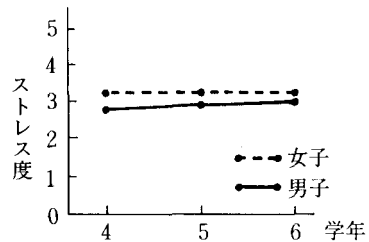


Fig. 1 児童の日常生活全般におけるストレス

### 2. 児童の生活領域別ストレス分析

#### (1) 学校生活におけるストレス

本調査におけるストレス項目の中で、学校生活に関するもののみについて因子分析を行ったところ、三つの因子が見出された。それらは、①学習場面に関する因子、②友人関係に関する因子、③社会的承認に関する因子、であった。Table 3は、この因子分析において0.4以上の高い負荷量を示した項目を列挙したものである。また、Fig. 2～Fig. 4は、それぞれの因子に関して、学年的な変化および性別の差異として図示したものである。こうした分析にも明らかで

あるように、それぞれの因子において学年間に大きな変化はみられないようである。しかし、性差に関してみると、学習場面および友人関係に関するストレスにおいては、各学年を通じて明らかに女兒の方が男児より強いようであり、それぞれ性差において主効果が認められた ( $F=18.012$ ,  $df=1/297$ ,  $p<.01$ ;  $F=10.508$ ,  $df=1/297$ ,  $p<.01$ )。

Table 2 日常生活全般におけるストレスの因子分析

| No | 項 目                                 | I      | II     | III    | IV     |
|----|-------------------------------------|--------|--------|--------|--------|
| 29 | 授業中先生にあてられた時                        | .6047  | -.0712 | -.0991 | .1707  |
| 9  | 授業参観や研究授業の時                         | .5593  | .0291  | -.0547 | .0140  |
| 12 | 算数で分からない問題があり、みんなができたような時           | .5541  | .1540  | -.1336 | .1655  |
| 4  | 授業中発表したことが間違いであることに気付いた時            | .5023  | .0672  | -.0661 | .0019  |
| 24 | 授業中分からない問題をあてられそうになった時              | .5021  | -.0594 | -.3398 | .1921  |
| 26 | テストの前の時                             | .4972  | .1726  | -.3280 | .0507  |
| 14 | 先生がいきなり「テストをやります」と言った時              | .4859  | .1320  | -.3220 | -.1781 |
| 7  | テストをしていて時間がなくなってきた時                 | .4595  | .3179  | -.0246 | .0150  |
| 6  | 国語の本読みの順番が回ってくる時                    | .4398  | .0078  | -.0092 | .1444  |
| 10 | 授業中、自信を持って手をあげたのに先生があててくれない時        | .0799  | .5881  | -.0666 | .0621  |
| 39 | おこづかいを少ししかもらえない時                    | -.0518 | .4767  | -.0361 | .0226  |
| 33 | 家の人から宿題をやったか聞かれた時                   | .1563  | .4677  | -.1319 | .1122  |
| 3  | 友達とけんかをしたり、学級の物をこわして、先生がわけを聞いてくれない時 | .0977  | .4321  | -.0109 | .0667  |
| 13 | 班競争の時、もたもたする人がいる時                   | .0336  | .4308  | -.1663 | .0210  |
| 34 | 家の人からお手伝いをたのまれた時                    | .0435  | .4112  | -.0180 | .0926  |
| 31 | 言いたくないことを友達から聞かれた時                  | -.0564 | .1995  | -.6110 | .0384  |
| 28 | 友達に無視された時                           | .1475  | .1254  | -.5968 | .1428  |
| 25 | 仲の良い友達から仲間はずれにされた時                  | .0880  | .1745  | -.5709 | .1495  |
| 27 | 運動会の徒競走の時                           | .2341  | -.1174 | -.5212 | .2080  |
| 15 | 友達が自分の目の前でないしょ話をはじめた時               | .0903  | .1172  | -.5181 | -.0082 |
| 20 | 気にしていることを言われた時                      | .0048  | .2754  | -.4720 | .0857  |
| 22 | 忘れ物があったり宿題を忘れたことに気付いた時              | .2450  | .0031  | -.4472 | .2638  |
| 18 | 組がえや席がえの時                           | .2090  | -.0259 | -.4456 | .1510  |
| 19 | 終業式の日通知表をもらう時                       | .1779  | -.0126 | -.4254 | .0803  |
| 41 | 家の人がかんかをしている所を見た時                   | .0206  | .0441  | -.2112 | .4935  |
| 49 | 学校や遊びから帰って、家の人がいらない時                | .0936  | .0294  | -.0834 | .4878  |
| 38 | 家の人からしかられた時                         | .1481  | .1428  | -.2169 | .4701  |
| 35 | 家の人がかんかのことをかわいがっていているか気になった時        | .1252  | .1444  | -.2199 | .4586  |
| 45 | 休みの日、学校から帰った時遊ぶ友達がいない時              | .1127  | .2214  | -.0394 | .4530  |
| 43 | 家の人がかんかよりきょうだいの方をかわいがっているような気になる時   | .1235  | .1053  | -.1883 | .4364  |

Table 3 学校生活におけるストレスの因子分析

| No | 項 目                                | I      | II     | III    |
|----|------------------------------------|--------|--------|--------|
| 29 | 授業中先生にあてられた時                       | .6687  | -.1317 | -.1136 |
| 9  | 授業参観や研究授業の時                        | .5762  | -.0285 | -.0300 |
| 24 | 授業中分からない問題をあてられそうになった時             | .5574  | -.3252 | .0666  |
| 12 | 算数で分からない問題があり、皆ができたような時            | .5444  | -.1326 | .2505  |
| 26 | テストの前の時                            | .4689  | -.3130 | .2109  |
| 6  | 国語の本読みの順番がまわってくる時                  | .4530  | -.0731 | -.0540 |
| 4  | 授業中発表したことが間違いであることに気付いた時           | .4468  | -.0877 | .1147  |
| 7  | テストをしていて時間がなくなってきた時                | .4342  | -.0072 | .3945  |
| 30 | 皆が飛び箱や鉄棒ができるのに自分だけできない時            | .4338  | -.3186 | .0684  |
| 23 | たくさんの人の前で発表する時                     | .4064  | -.4111 | -.2043 |
| 28 | 友達に無視された時                          | .1558  | -.6387 | .1066  |
| 31 | 言いたくないことをわざと友達から聞かれた時              | -.0816 | -.6211 | .2173  |
| 25 | 仲の良い友達から仲間はずれにされた時                 | .1286  | -.5785 | .1756  |
| 27 | 運動会の徒競争の時                          | .2625  | -.5547 | -.0839 |
| 15 | 友達が自分の目の前でないしょ話をはじめた時              | .0883  | -.4933 | .1073  |
| 20 | 気にしていることを言われた時                     | .0113  | -.4857 | .2178  |
| 22 | 忘れ物があったり宿題を忘れたことに気付いた時             | .2785  | -.4614 | .5736  |
| 17 | 先生にしかられた時                          | .2565  | -.4419 | -.0452 |
| 18 | 組がえや席がえの時                          | .2343  | -.4294 | -.0234 |
| 23 | たくさんの人の前で発表する時                     | .4064  | -.4111 | -.2043 |
| 19 | 終業式の日通知表をもらう時                      | .1846  | -.4037 | -.0495 |
| 10 | 授業中、自信をもって手をあげたのに先生があててくれない時       | .0419  | -.0786 | .5913  |
| 3  | 友達とけんかしたり、学級の物をこわして、先生がわけを聞いてくれない時 | .0726  | .0039  | .4755  |
| 13 | 班競争で、もたもたする人がいる時                   | -.0016 | -.1886 | .4607  |

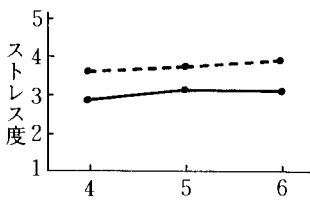


Fig. 2 学習場面に関するストレス

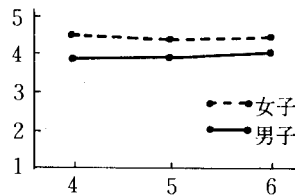


Fig. 3 友人関係に関するストレス

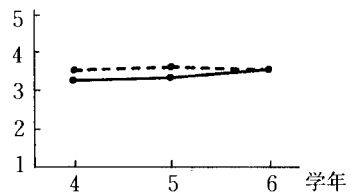


Fig. 4 社会的承認に関するストレス

このように、学校生活のみに関した児童の心理的ストレスは、学習場面において級友や教師の面前で失敗したり恥をかくことに関連したものが多いと言えよう。井上(1986)は、学級集団は学業への成功を特に強化しがちであるため、その中での失敗となると他では補いきれない程の失敗となり得ると指摘している。子ども達がこのような経験を多少とも持っていれば、失敗に対する恐れは大きな心理的ストレスとなると考えられる。また、友人関係において仲間から取り残されることへの不安や、自己の劣等コンプレックスを指摘されることへの憤りも、児

童の心理的ストレスとして大きい要因であると考えられる。さらに、子ども達には、教師や仲間から認められたいという承認欲求が強く、それが阻害されることへの危惧の念が生じることも大きいストレスとなっているようである。

長根(1987)は、学校生活における児童の心理的ストレスとして、友人関係の不調に関する事、他者から取り残される不安に関する事、人前で発表する場面での緊張に関する事、などを上げている。また、こうした傾向は、因子構造こそ多少異なっていたが、全体としては上記の本研究の結果とほぼ同様のものであった。したがって、児童期の子どもの学校生活における心理的ストレスには、その根底には常に友達や教師などの人間関係に関連した不安や問題が横たわっていると考えられる。一方、今回の結果との間にみられる僅少の差異の背景として地域性といった傾向があるとすれば、今日大都市やその近郊で特徴的となっている傾向が近い将来に全国的な傾向として一般化することも考えられる。中でも、従来は大人のストレス源とされていた人間関係に起因した心理的ストレスが、国の東西を問わず、子どもの社会に増大していくことは、今後とも予測され、解決すべき大きな課題となろう。

## (2) 家庭生活・地域生活におけるストレス

家庭や地域での生活における児童の心理的ストレスについての項目に関して、上記と同様の因子分析を施したところ、以下の三つの因子が見出された。それは、①家族関係に関する因子、②生活習慣に関する因子、③遊びに関する因子、の諸因子であった。Table 4 は、この項目群の因子分析において0.4以上の高い負荷量を示した項目に関して列挙したものである。このように、子どもの家庭や地域での生活における心理的ストレスは、家族との精神的安定性や遊びの欲求の阻害といった人間的交流の満足と関連した要因が大きいようである。いずれの場合においても、児童を取り巻く家族間の愛情や家族内の親密性などが考えられることから、家族との関わりは子どものストレスにきわめて大きい影響を及ぼすものと思われる。

Fig. 5~Fig. 7 は、家庭や地域での生活における現代の子どもの心理的ストレスについて、上の因子分析により得られた三つの因子に関して、それぞれ学年的な変化および性別の差異として図示したものである。こうした領域におけるストレスにおいても、上記「学校生活におけるストレス」の場合と同様に、学年的な発達差は認められなかった。しかし、Fig. 5 に示した家庭内の人間関係に関するストレスにおいては、性差が認められ ( $F=7.174, df=1/297, p<.01$ )、上と同様に女兒の方が男児よりも強いストレスを感じているようである。

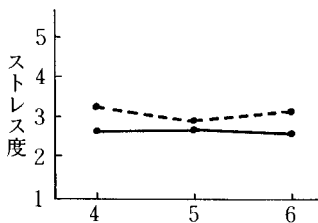


Fig. 5 家族関係に関するストレス

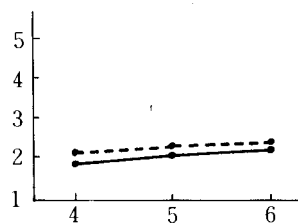


Fig. 6 生活習慣に関するストレス

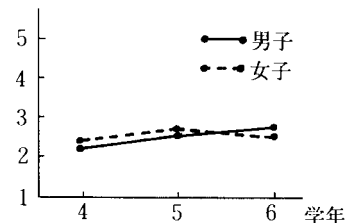


Fig. 7 遊びに関するストレス

## 3. ストレスの発達の变化(学年差)及び性差

本研究において用いた50項目すべてに関して「学年×性」の二要因分散分析を行った。その結果、学年および性に主効果の見られた項目をまとめたのが Table 5 および Table 6 である。このように、学年間に関しては、Table 5 に示すように、23項目において、また男女間に関し



児童期の心理的ストレスに関する一研究（堂野・田頭・土江）

Table 4 家庭生活・地域生活におけるストレスの因子分析

| No | 項 目                         | I     | II     | III   |
|----|-----------------------------|-------|--------|-------|
| 35 | 家の人が自分のことをかわいがってくれているか気になる時 | .5363 | .2513  | .0803 |
| 43 | 家の人が自分よりきょうだいをかわいがっている気になる時 | .5255 | .1604  | .0539 |
| 41 | 家の人がけんかをしている所を見た時           | .5135 | -.0829 | .1976 |
| 38 | 家の人からしかられた時                 | .4538 | .0399  | .2571 |
| 49 | 学校や遊びから帰って、家の人がいない時         | .4503 | .1216  | .0551 |
| 33 | 家の人から宿題をやったか聞かれた時           | .1402 | .5483  | .1976 |
| 34 | 手伝いをたのまれた時                  | .0457 | .5171  | .1205 |
| 48 | どこへ行っても遊ぶところがない時            | .0732 | .2007  | .5580 |
| 40 | 休みの日に家の人と遊んだり、出掛けられない時      | .2581 | .0475  | .4656 |

Table 5 学年間に有意差のみられるストレス項目

| No | 項 目 内 容                              | F      | p  |
|----|--------------------------------------|--------|----|
| 34 | 家の人からお手伝いをたのまれた時                     | 9.114  | ** |
| 39 | おこづかいを少ししかもらえない時                     | 11.571 | ** |
| 9  | 授業参観や研究授業の時                          | 8.071  | ** |
| 14 | 先生がいきなり「テストをやります」と言った時               | 7.894  | ** |
| 7  | テストをしていて時間がなくなってきた時                  | 6.552  | ** |
| 17 | 先生にしかられた時                            | 6.362  | ** |
| 48 | どこへ行っても遊ぶ場所がない時                      | 6.921  | ** |
| 20 | 気にしていることを言われた時                       | 6.195  | ** |
| 49 | 学校や遊びから帰って、家の人がいない時                  | 6.216  | ** |
| 33 | 家の人から宿題をやったか聞かれた時                    | 5.704  | ** |
| 13 | 班競争で、もたもたする人がいる時                     | 5.382  | ** |
| 4  | 授業中、発表したことが間違いであることに気付いた時            | 5.272  | ** |
| 3  | 友だちとけんかをしたり、学級の物をこわして、先生がわけを聞いてくれない時 | 4.469  | *  |
| 16 | みんなが給食を食べ終えても、自分だけがまだ残っている時          | 4.384  | *  |
| 5  | インフルエンザの予防注射の時                       | 4.232  | *  |
| 37 | 家の人が自分ときょうだい、友だちをくらべた時               | 4.147  | *  |
| 12 | 算数でわからない問題があり、みんなができたような時            | 3.855  | *  |
| 6  | 国語の本読みの順番がまわってくる時                    | 3.544  | *  |
| 10 | 授業中、自信をもって手をあげたのに先生があててくれない時         | 3.478  | *  |
| 23 | たくさんの人の前で発表する時                       | 3.180  | *  |
| 1  | 友だちにからかわれたり、悪口を言われた時                 | 2.571  | +  |
| 8  | 音楽の時間、一人で歌を歌ったり、ふえをふいたりする時           | 2.552  | +  |
| 25 | 仲の良い友だちから仲間はずれにされた時                  | 2.403  | +  |

\*\*  $p < .01$  \*  $p < .05$  +  $p < .10$

Table 6. 男女間に有意差のみられるストレス項目

| No | 項 目 内 容                      | F      | p  |
|----|------------------------------|--------|----|
| 5  | インフルエンザの予防注射の時               | 25.231 | ** |
| 6  | 国語の本読みの順番がまわってくる時            | 13.934 | ** |
| 9  | 授業参観や研究授業の時                  | 19.534 | ** |
| 15 | 友だちが自分の目の前でないしょ話をはじめた時       | 16.164 | ** |
| 16 | みんなが給食を食べ終えても、自分だけがまだ残っている時  | 16.704 | ** |
| 24 | 授業中分からない問題をあてられそうになった時       | 59.485 | ** |
| 25 | 仲の良い友だちから仲間はずれにされた時          | 14.997 | ** |
| 26 | テストの前の時                      | 23.134 | ** |
| 27 | 運動会の徒競争の時                    | 25.485 | ** |
| 28 | 友だちに無視された時                   | 24.615 | ** |
| 29 | 授業中先生にあてられた時                 | 29.776 | ** |
| 30 | みんなが飛び箱や鉄棒ができるのに自分だけできない時    | 29.443 | ** |
| 43 | 家の人が自分よりきょうだいをかわいがっている気になる時  | 24.292 | ** |
| 1  | 友だちにからかわれたり、悪口を言われた時         | 12.959 | ** |
| 4  | 授業中、発表したことが間違いであることに気付いた時    | 12.297 | ** |
| 7  | テストをしていて時間がなくなってきた時          | 11.013 | ** |
| 12 | 算数でわからない問題があり、みんなができたような時    | 12.313 | ** |
| 17 | 先生にしかられた時                    | 12.419 | ** |
| 21 | 図工や家庭科の作品を作る時に、失敗しやしないか気になる時 | 12.157 | ** |
| 23 | たくさんの人の前で発表する時               | 12.692 | ** |
| 37 | 家の人が自分ときょうだい、友だちをくらべた時       | 11.488 | ** |
| 39 | おこづかいを少ししかもらえない時             | 12.820 | ** |
| 49 | 学校や遊びから帰って、家の人がいない時          | 11.036 | ** |
| 19 | 終業式の日、通知表をもらう時               | 10.617 | ** |
| 35 | 家の人が自分のことをかわいがってくれているか気になる時  | 9.646  | ** |
| 44 | 友だちが約束をやぶった時                 | 8.666  | ** |
| 46 | 学校以外の所で友だちとけんかした時            | 8.287  | ** |
| 41 | 家の人がけんかをしている所を見た時            | 7.701  | ** |
| 18 | 組がえや席がえの時                    | 7.288  | ** |
| 42 | きょうだいげんかをした時                 | 6.456  | *  |
| 14 | 先生がいきなり「テストをやります」と言った時       | 4.388  | *  |
| 31 | 言いたくないことをわざと友だちから聞かれた時       | 4.313  | *  |
| 32 | 新しい単元(内容)の勉強に入る時             | 3.803  | *  |
| 22 | 忘れ物があったり宿題を忘れたことに気付いた時       | 3.655  | +  |
| 20 | 気にしていることを言われた時               | 3.550  | +  |
| 36 | 何か欲しい物をおねだりする時               | 3.386  | +  |

Table 7 学年×性において交互作用のみられるストレス項目

| No | 項 目 内 容                     | F     | p  |
|----|-----------------------------|-------|----|
| 41 | 家の人がけんかをしている所を見た時           | 7.633 | ** |
| 25 | 仲の良い友だちから仲間はずれにされた時         | 3.439 | *  |
| 47 | やりたくない遊びをしなければならない時         | 3.035 | *  |
| 6  | 国語の本読みの順番がまわってくる時           | 3.020 | *  |
| 39 | おこづかいを少ししかもらえない時            | 2.994 | +  |
| 37 | 家の人が自分ときょうだい、友だちをくらべた時      | 2.475 | +  |
| 21 | 図工や家庭科の作品を作る時に失敗しやしないか気になる時 | 2.714 | +  |
| 5  | インフルエンザの予防注射の時              | 2.648 | +  |
| 4  | 授業中、発表したことが間違いであることに気付いた時   | 2.535 | +  |

\*\*  $p < .01$  \*  $p < .05$  +  $p < .10$

では、Table 6 に示すように、36項目において有意差が認められた。また Table 7 はこの両者の交互作用において有意差および傾向が見出された項目である。

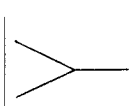

こうした結果において、まず Table 5 に示す項目に関して、ストレスの学年差について分析した。そこで、全体的な傾向を把握するため、t 検定により下位分析を試みた。その結果、児童期におけるストレスの発達的变化の傾向として、①4年生から5年生にかけて顕著な上昇があり、5年生から6年生にかけては殆ど変化のみられないタイプ、②4年生から5年生にかけては殆ど変化がみられず、5年生から6年生にかけて著しい上昇を示すタイプ、③4年生から6年生においてはそれほど高くなく、5年生のみにおいて著しく高くなっているタイプ、④4年生と6年生ではかなり高いが、5年生ではそれほど高くないタイプ、⑤4年生から6年生へと徐々に上昇するタイプ、⑥4年生から6年生へと徐々に下降するタイプ、の6種類の変化パターンが見出された。

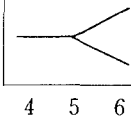
ところが、第⑤タイプ及び第⑥タイプにおいては、各パターンで1項目ずつ程度しか顕著な傾向を示すものはみられず、多くは第①及び第②タイプの変化を示している。こうした学年的な推移からみると、児童期のストレスの発達的变化の全体的な特徴としては、男女児とも、5年生という時期が一つの大きな変動期・転換期となっているようである。

こうした傾向は岸田（1951）や宮城（1979）などにも指摘され、さらに最近において山中（1988）、堂野・山中（1988）、堂野・山中（1989）、堂野・野中（1989）、にも同様の結果が見出されているような児童期から青年期の劣等感の発達的变化の傾向とも一致している。やはり5年生という時期は多くの意味で変換期であり、心身ともに動揺しやすく不安定になりやすい発達の一段階と考えられる。したがって、この結果は、人間の発達過程の中で、人生の3大危機ともいわれる「思春期」あるいは「第2反抗期」の入口に立って、自我の確立や自身の生き方について模索する子どもの不安定性を如実に示す姿ともいえよう。

次に、Table 8 に示すように、ストレスの男女児間の差異、つまり性差に関して同様の分析を行った。全体的な傾向としての性差については前記の通りであるが、ここでは各項目の性差の傾向について、統計的な検定を加えて分析を試みた。その結果、児童期のストレスにおける性差の特徴的傾向として、①各学年を通して一貫して一方の性（多くは女子）のストレス度が高いタイプ、②4年生及び5年生にのみ性差が認められるタイプ、③5年生で交差し、4年生と6年生で逆転した差異を示すタイプ、④5年生及び6年生にのみ性差が認められるタイプ、

Table 8 ストレスにおける性差とそのタイプ

| 性差のタイプ   | No | 項目内容                         | 4年    |    | 5年    |    | 6年    |    |
|--|----|------------------------------|-------|----|-------|----|-------|----|
|  |    |                              | t     | p  | t     | p  | t     | p  |
| <br>4 5 6<br>(注)<br>縦軸：ストレス度<br>横軸：学年 | 1  | 友だちにからかわれたり、悪口を言われた時         | 2.651 | *  | 2.346 | *  | 3.311 | ** |
|  | 9  | 授業参観や研究授業の時                  | 2.925 | ** | 2.012 | +  | 2.925 | ** |
|  | 26 | テストの前の時                      | 3.446 | ** | 2.944 | ** | 2.201 | +  |
|  | 29 | 授業中先生にあてられた時                 | 3.011 | ** | 2.057 | +  | 4.523 | ** |
|  | 30 | みんなが鉄棒や飛び箱ができるのに自分だけできない時    | 2.790 | *  | 3.136 | ** | 3.450 | ** |
|  | 43 | 家の人が自分よりきょうだいをかわいがっている気になった時 | 2.492 | *  | 2.707 | *  | 2.720 | *  |
| <br>4 5 6                             | 12 | 算数で分からない問題があり、みんなができたような時    | 3.375 | ** | 2.181 | +  |       |    |
|  | 15 | 友だちが目の前でないしょ話を始めた時           | 2.639 | *  | 2.852 | *  |       |    |
|  | 21 | 図工や家庭科の作品を作るとき               | 3.180 | ** | 1.999 | +  |       |    |
|  | 25 | 仲の良い友だちから仲間はずれにされた時          | 4.337 | ** | 2.379 | *  |       |    |
|  | 28 | 友だちに無視された時                   | 4.821 | ** | 2.608 | *  |       |    |
|  | 37 | 家の人が自分ときょうだい、友だちをくらべた時       | 3.467 | ** | 2.268 | *  |       |    |
|  | 49 | 学校や遊びから帰って、家の人がいない時          | 2.150 | +  | 2.111 | +  |       |    |
| <br>4 5 6                            | 5  | インフルエンザの予防注射の時               | 4.273 | ** |       |    | 3.692 | *  |
|  | 6  | 国語の本読みの順番がまわってくる時            | 3.006 | ** |       |    | 3.775 | ** |
|  | 27 | 運動会の徒競争の時                    | 3.030 | ** |       |    | 4.450 | ** |
|  | 35 | 家の人が自分のことをかわいがっているか気になった時    | 2.260 | *  |       |    | 2.918 | ** |
| <br>4 5 6                           | 24 | 授業中分からない問題をあてられそうになった時       |       |    | 4.141 | ** | 3.938 | ** |
|  | 39 | おこづかいを少ししかもらえない時             |       |    | 2.817 | *  | 3.152 | ** |
| <br>4 5 6                           | 7  | テストをしていて時間がなくなってきた時          | 2.939 | ** |       |    |       |    |
|  | 20 | 気にしていることを言われた時               | 2.613 | +  |       |    |       |    |
|  | 22 | 忘れ物や宿題を忘れたことに気付いた時           | 1.999 | +  |       |    |       |    |
|  | 32 | 新しい単元(内容)の勉強に入る時             | 2.460 | *  |       |    |       |    |
|  | 41 | 家の人がけんかをしている所を見た時            | 3.597 | ** |       |    |       |    |
| <br>4 5 6                           | 17 | 先生にしかられた時                    |       |    | 3.083 | ** |       |    |
|  | 31 | 言いたくないことを友達から聞かれた時           |       |    | 2.102 | +  |       |    |
|  | 42 | きょうだいげんかをした時                 |       |    | 2.548 | *  |       |    |

| 性差のタイプ   | No | 項 目 内 容                      | 4 年 |   | 5 年 |   | 6 年   |    |
|--|----|------------------------------|-----|---|-----|---|-------|----|
|  |    |                              | t   | p | t   | p | t     | p  |
| <br>4 5 6 | 4  | 授業中、発表したことが間違いであることに気付いた時    |     |   |     |   | 4.445 | ** |
|  | 14 | 先生がいきなり「テストをやります」と言った時       |     |   |     |   | 2.550 | *  |
|  | 16 | みんなが給食を食べ終わっても、自分だけがまだ残っている時 |     |   |     |   | 3.385 | ** |
|  | 19 | 終業式の日、通知表をもらう時               |     |   |     |   | 2.552 | *  |
|  | 23 | たくさんの人の前で発表する時               |     |   |     |   | 2.415 | *  |
|  | 46 | 学校以外の所で友達とけんかした時             |     |   |     |   | 2.024 | +  |

\*\*  $p < .01$  \*  $p < .05$  +  $p < .10$

⑤4年生にのみ性差が認められるタイプ、⑥5年生にのみ性差が認められるタイプ、⑦6年生にのみ性差が認められるタイプ、の7つのパターンが見出された。

こうした傾向について総括してみると、子どものストレスにおいては、「学年差」の場合と同様に、「性差」に関しても、5年生において大きな転換期が認められるようである。しかし、全体的傾向としては、この段階においては、多くの面で女兒のストレスの方が男児のそれより多大のようである。したがって、発達加速現象として子どもの発達の早期化が指摘される今日ではあるが、性別にみると、やはり女兒の方が男児よりも早く思春期に足を踏み入れ、様々な面で女兒が早期から心理的ストレスの影響を受けることが多いようである。

児童期から青年期への精神的発達の諸側面には、親や成人が社会的に考慮すべき課題は多い。本稿に取り上げた“子どものストレス”や“劣等感”などは、現代の子どもを取り巻く環境の中で特に憂慮される状況となっている。こうした心理的な圧力が子ども達の生活に及ぼす影響としては、人間の向上へのエネルギー源などとポジティブな面も指摘されているが、子どもの日常生活ではやはりネガティブな面も多い。このような立場からみると、子どものストレスについて精神衛生的な観点から検討した藤土(1979)や平井(1985)、児童期から青年期へのストレスの実態について分析した岡堂(1986b)や本明(1988)、子どもの生活の大部分を占める学校生活に関するストレスについて指摘した勅使河原(1988)や土沼(1988)、家庭での生活や親子関係から生じるストレスの問題性を示唆した内山(1983)や白崎・岡堂(1986)、こうした子どものストレスに起因した社会的病的現象について警告を与えている大塚(1985)や服部(1985)、などは現代人として傾聴すべき警鐘であろう。

さらに、現代のような「ストレス社会」がそのテンポを緩めることなく、このままのペースで進行して行くようであれば、将来ますます深刻な事態を迎え、人間社会の大きな問題となることは必至であろう。こうした傾向は、Selye, H. (1956)やJanis, I. L. (1969)等の予測的警告に示されているような現象であり、日本における今日の問題としても石川(1983)や丸野(1989)などに指摘されている。特に、現代のような高度産業化社会においては、田崎・八木(1975)や稲村(1988)などに指摘されるような職業生活に関連したストレスの影響性、岡堂(1986a)が指摘したテクノ・ストレス時代という背景に伴う諸種の問題、Lynch, J. J. (1976)等も指摘するように、こうした環境の中で成長する子ども達のストレスの長期的影響、また益々希薄化する人間関係に関するストレス、など検討すべき課題は山の如くである。

引用・参考文献

- 安藤延男 1985 学校社会のストレス 講座：生活ストレスを考える(5) 垣内出版
- Bowlby, J. 1951 *Maternal Care and Mental Health*. World Health Organization Monograph, 2.
- Cannon, W. B. 1929 *Bodily Changes in Pain, Hunger, Fear and Rage*. New York: Appleton.
- Carson, R. 1962 *Silent Spring*. Boston: Houghton Mifflin.
- Chambers, W. N. & Reiser, M. F. 1953 *Emotional Stress in the Precipitation of Congestive Heart Failure*. *Psychosomatic Medicine*, 15, 38-60.
- Darwin, C. 1955 *The Expression of the Emotions in Man and Animals*. New York: Philosophical Library.
- 堂野佐俊 1987 ストレスとストレス解消法 小林利宜(編)「現在社会と精神衛生」東信堂
- 堂野佐俊・山中幸子 1988 児童の劣等感と学習意欲の相関的研究(その1)——現代の児童における劣等感分析—— 広島文教教育 Vol. 3, 27-40.
- 堂野佐俊・山中幸子 1989 児童の劣等感と学習意欲の相関的研究(その2)——劣等感と学習意欲との関係—— 広島文教教育 Vol. 4, 33-44.
- 堂野佐俊・野中陽子 1989 自我態度と要求水準に関する一研究——劣等感・優越感と要求水準—— 広島文教女子大学紀要<人文科学編> Vol. 24, 47-59.
- Freud, S. 1923 *Neu Folgender Vorlesung zur Einfuhrung in die Psychoanalyse* 古沢平作(訳) 1951 続・精神分析入門 フロイト選集3 日本教文社
- 藤土圭三 1979 児童期とその精神衛生 沖原・西本(編)精神衛生——家庭・学校・職場 福村出版
- Harlow, H. F. 1958 *The Nature of Love*. *American Psychologist*, 13, p 673.
- 服部祥子 1985 ギャングエイジ喪失の時代<現代のエスプリ> No. 227 至文堂
- 平井信義(編) 1985 子どもの精神衛生「こころの科学」No. 2 日本評論社
- 稲村 博(編) 1988 職場のメンタルヘルスの実際<現代のエスプリ別冊：職場のメンタルヘルス Q and A> pp 5-76. 至文堂
- 石川 中 1983 ストレスの心理と生理<サイコロジー> No. 37 サイエンス社
- Janis, I. L. 1969 *Stress and Frustration*. New York: Harcourt Brace Jovanovich, Inc. 秋山俊夫・他(訳)
- 1984 ストレスと欲求不満——こころの健康のために—— 北大路書房
- 岸田元美 1951 児童における劣等性意識とその要因 児童心理, 29, (11), 102-106.
- Liddell, H. S. 1954 *Conditioning and Emotions*. *Scientific American*, 190, p 48.
- Lynch, J. J. 1976 *The broken heart; The medical consequences of loneliness*. New York: Basic Books Inc.
- 堂野佐俊(編訳) 1985 現代人の愛と孤独——心臓(こころ)の医学心理学—— 北大路書房
- 丸野 廣(編) 1989 ストレスとつきあう「こころの科学」No. 26 日本評論社
- 宮城音弥 1979 劣等感——その本体と克服—— 東京書籍
- 本明 寛 1988 現代社会とストレス 青年心理：ストレス特集, 67, 2-11. 金子書房
- 長根光男 1987 学校生活における児童の心理的ストレスの分析——小学校4・5・6年生を対象にして—— 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 606-607.
- 岡堂哲雄 1986 テクノ・ストレス時代の現実と展望<現代のエスプリ> No. 225 至文堂
- 岡堂哲雄(編) 1986 子どものストレス<現代のエスプリ> No. 227 至文堂
- Ordway, N. K., Leonard, M. F., & Ingles, T. 1969 *Interpersonal Factors in Failure to Thrive*. *Southern Medical Bulletin*, 57, 23-28.
- 大塚義孝 1985 ストレスに病む子どもの世界<現代のエスプリ> No. 227 至文堂
- Pavlov, I. P. 1929 *Lectures on Conditioned Reflexes*. trans. W. H. Gantt. New York: International Publishers.
- Scott, J. P. 1967 *The Development of Social Motivation*. *Nebraska Symposium on Motivation*. Lincoln, Neb.: University of Nebraska Press, 111-132.
- Selye, H. 1956 *The Stress of Life*. New York: McGraw-Hill
- Selye, H. 1974 *Stress Without Distress*. Philadelphia & New York: J. B. Lippincott.
- 白崎けい子・岡堂純子 1986 親子関係のストレスと子どもの行動問題<現代のエスプリ：子どものストレス> No. 227, 123-138. 至文堂
- Spitz, R. A. 1950 *Anxiety in Infancy: A Study of its Manifestations in the First Year of Life*. *International Journal of Psychoanalysis*, 31, 138.
- 田崎醇之助・八木孝彦 1975 職場のストレス——心を分析する法——新・産業心理学入門(5) 大日本図書

児童期の心理的ストレスに関する一研究（堂野・田頭・土江）

- 勅使河原勝男 1986 「いじめ」と体罰にみる学校生活のストレス——その類型的特点徴〈現代のエスプリ：子どものストレス〉 No. 227, 50-65. 至文堂
- 土沼雅子 1986 思春期女性のストレスと心の健康障害〈現代のエスプリ：女性のストレス〉 No. 226, 51-66. 至文堂 .
- 内山喜久雄 1983 現代社会とストレス〈サイコロジー〉 No. 37 サイエンス社
- Wolf, S. & Goodell, H. 1976 Behavioral Science in Clinical Medicine. Springfield, Ill.: Charles C. Thomas. p 18.
- 山中幸子 1988 児童の劣等感と学習意欲に関する研究 昭和62年度広島文教女子大学文学部初等教育学科卒業論文

〔付記〕 本研究を進めるにあたり貴重な御教示・御示唆をいただいた埼玉県坂戸市立千代田小学校教諭長根光男先生に厚く御礼を申し上げます。また、調査に際しては鳥根県蕨川郡斐川町立荘原小学校の諸先生および児童の皆様にも多大なる御協力を賜りました。ここに記して厚く謝意を表します。

（初等教育学科 教授 堂野佐俊）  
（初等教育学科 助教授 田頭穂積）  
（江津市立渡津小学校教諭 土江禎子）

—平成2年11月17日 受理—